

## 注釈

——古くして新しきもの——

中村幸彦

皆さんは入学以来、一学年の方も早くも半年、先生方の講読に於て、上級生は演習の為に自ら試みて、古典文学とは原文で読んで見ると、かつて現代語訳で読んだのとは違う。沢山出版されている頭注脚注本でわかった気になっていたが、先生方の

詳しい注釈入りの講義を聞くと、又違った文学だと思ふようになられたのではないか。勿論注釈は日本の古典のみではなく、外国語の文学の場合もある。鷗外や漱石の著述も、もう注釈が必要となった。私の可笑しい経験を話せば、もう二年程前か、文芸雑誌『すばる』に、題はもう忘れたが、新人類用語を一面にちりばめた作品が所載された。一つこれを読んで見ようと、半日ばかりで、『現代用語の基礎知識』の類を用いて調べて見たが、手許の『基礎知識』は一二年前のものであった故か、と

うとうと説め切れないうで終った。後に聞けば、この種の作品のみを登載する雑誌も出ているとのこと。現代作品でも、かくの如く注釈は必要である。がそれらまでに付合う義理は今の私にはないので、日本の古典のみにふれることにする。

日本の古典の注釈は平安末鎌倉期から『古今集』や『万葉集』のものが残っているのは御承知の通り。我々の大先輩本居宣長の全集約二十冊を並べて見つつ、これでも、もし『古事記』を彼が残していなければ、この全集の編集出版もなかったであろうと思つたりする。思想上では、宣長の先聲、近世儒学で古義学を唱えた伊藤仁齋でも、彼の生涯の仕事は、五回も六回も書き改めた『論語古義』と称する注釈と、『論語』の血脉を伝えているとする『孟子』や『中庸』の注釈を中心とする。

その他の著述は、以上の注釈書の補注に当る。その一つ「語孟字義」に云う。

惟ニ能ク孔孟ノ意味血脈ヲ識ルノミニ非ズ、能ク其ノ字義ヲ理會シテ、大イニ膠ルニハ至ラザルヲ以テス、夫レ字義ノ學問ニオケル固ニ小ナリ、然レドモ一モ其ノ義ヲ失スルトキハ則チ、書ヲ為スコト細ナラス、只当ニ一一之ヲ語孟ニ本ヅケテ、能ク其ノ意思語脈ニ合セテ而ル後ニ、方ニ可ナルベシ、妄意選就シテ以ツテ己ガ私見ヲ雜フ可カラズと述べて、古義學の方法を示している。ここの處、又後にもふれることにしよう。更に中國第一等の儒家朱熹（朱子）に於ても、四書五經の注釈を生涯の中心の業績とする。いくらかも例があつて、これらを見ても、古典研究は注釈に始まって注釈に終ると云つてよい。一つの作品についても、初めから注釈を志して、重ね重ね益々深くなつて行かねばならぬことになる。

こんな事を云い出すと、会場の皆さんの中から、私は一生古典研究など大変なことをやる気はない。こんな話は聞くのは「ヤーマク」と退場する方が出るかも知れない。しかし大学で選んだ學問が何であつても、その方法を心がけ体得出来れば、否、大学と云う處は知らず知らずそうなる處であつて、その結果は、その方法を生涯人生万般に応用で

きるようになるものである。これからお話することながら、注釈に慣れて、言語表現を順序立てて理解する能力を身に付けることになれば、現実社会に出て、人の書いたもの、人の話したことを、間違ひなく判断し受取る能力や勤が養われるものである。逆にこれに応用すれば、自分も過不及なく立派な言語表現力がつき発表できるようになる。第二世界大戦時英國の名宰相チャーチルは、上級學校へ進學の時、数学とギリシヤ語ラテン語が不得手で困つたが、英語だけは大きに勉強した。それで後年にはイギリス文芸院會員にもなり、立派な第一次、第二次戦争回顧録二十數卷を残している。注釈に慣れば、皆さんの中から第二の田辺聖子さんが出ないとも限らない。マアマア、おいどを落付けて、終りまで聞いて下さい。

ただし以上の例の儒家二人は思想家で、思想研究者ではない。注釈をしながらか、その中で自分の學問即ちここでは思想を構築して行つた。別の例を採れば、仏教の各宗派の開祖達が、經典を説きながら、自分の宗旨を樹立した如きものである。我々國文學に志すものは科学的でなければならぬ。簡単に云えば、思想家達は、主觀的な唯我独尊の思想をまとめ、國文學者は、誰にでも通ずる客觀的な知識を求め、そこに大きな差のあるこ

とは、心せねばならぬ。

しかし一方古典なるものは、文学作品をも含めて、誰でも好きなように読んでよい。それでこそ古典で、様々の時代を通じて生命を長らえている印でもある。従って一作品でも時代時代の、多くは各時代の代表者の発言として残り伝っているが、受け取り方即ち時代的理解が存する。国文学では、その為に研究史なる分野を設けてある。そのよし悪しを云って見ても仕方はない。時代性として認めねばならない。現代にも評論家と称せられる方々があつて、古典文学評論も多い。この本を自分は斯く読むと発表し、それぞれに面白いとし、賛成し、それに従う人も多くあつたりする。一つだけ例を掲げる。正岡子規が蕪村の句を写生的客観的と評した。当時の俳人達は勿論、その後の学者達も賛同したことであつた。不思議なもので「蕪村句集講義」などで、客観的と注釈説明されるのを見ると、その通りだと、若い時の私自身も思つたことであつたが、現今では、専門家で子規達の説の通りと認める人はなくなつた。何故か蕪村も子規をもひっくりかえり、国文学的注釈が深くなつたからである。そして、そう云われれば又、写生的でない方が当然と思われて来る。子規の写生説は、外国の写生画の説に影響を受けたものと云う。それならば西欧近代の論。蕪村は云う迄もなく近世の

文人画家であつた。文人画とは一種構成的な画風である。従つてと云つてよからうか、彼の俳諧も構成的と云つてよい。しかし愛でも子規の評論を非難すべきでない。元來評論とはそうしたものの、それは対象たる作品を自身の方へ引きつける。勿論自分の文学鑑賞力が正しいと認めているからこそ出来るのであるが、評論とは、そうして引きつける思考形式のものなのである。とすれば同じ対象でも個人により時代により違つていても仕方がない。或は当然なのである。

国文学はこれも科学の一つである。正しいと思われる一つの結論を求め追わねばならない。作品でその一つしかない場合とは、作者がどう思ひどう考へてか、その作品を発表した場合、しかしこれだけでは文学作品が存在したとは云えない。その生れた作品を当代の読者が、如何に受取つて鑑賞したかを合せて、作品の生きていた場合である。云わば歴史的存在としての作品へ、研究者の方が出来る限り近づいて、当時の作者読者の考へにせまらうとする姿勢をとることが肝要である。その為には、第一にその作品が生きていた時代風に必要な限り読まねばならぬ。それがこれから話しに入る注釈することなのである。批評家だとして、古典の歴史的存在なることを無視するものではないが、批評家には立論の原理のようなものが、第一に、又中心に

存して、それが働くものである。その原理のようなものとは文学概論で論ずる文学の哲学、これを爰では文芸学と称しておく。国文学研究として文芸学を無視など勿論しないけれども、歴史的存在として理解することを中心又は第一とする。これを注釈学などと呼んで見てもよいかも知れぬ。

ただし歴史的存在などと云うと、文化史的理解と誤解されかねないが、文化史的理解は文学研究でなく、歴史的研究で、それはそれとして必要であるが、混淆してはならない。また注釈と云えば、嘗つては語釈文法に、主として力をそそいだ時があつて、「評釈」と題して、語釈文法の外に、批評なる欄を設け、そこで文学性にふれる文章を付け加えたりした。しかしその部分で、私が注意している当代的批評に終つたりしたものである。私の云う注釈は、語釈文法は勿論だが、それは方法で、深く文学性を明らかにするを目的とするものである。従つて注釈者としても、文学は何ぞやを知るために文芸学の知識や文芸学的思考力を養ひ貯えねばならないが、せつ、か、ち、に、その知識思考力を発動して、結論を出さないう注意すべきである。その時代に作者がどう面白く作り、読者がどう面白く読んだかが、具体的につまびらかになる迄、注釈を深めて行くことである。或る点に達すると自然と貯えた文芸学的知識が働いて、又自から働か

せて、或種の文芸学的理解がまとまるが、急ぐことなく注釈を更に深める。そうしたことをくりかえして、深い理解に達することを努めるべきである。

面白い例を一つ。私達学生時代、もう五十年も以前のこと、例の評釈などが出だした頃、気の早い研究者が、西鶴のリアリズム、芭蕉の象徴詩などと、アッテルを張つて、一時かかる云い方が流行した。これも文芸学立場から評価したもの、そのあせりから生じたものであつたらう。しかしリアリズムなる用語の厳密な理解と、西鶴の素材や古典の利用などについて今日の如き詳密さが進むにつれて、この語が使用されなくなった。芭蕉の句も、近時、歌語の使用の研究や、それによる新しい句の解釈が次々と出現して、象徴詩などの用語で片付けられなくなった。素材や影響作品を求めたり、歌語の使用や、それによる句趣の発見は、皆注釈の重要な一部である。今日、日本の考古学が大いに進歩したのは、地下を掘ることが深くなったからだそうである。注釈も古い時代へ肉薄して深く進めねばならぬ。皆さんの対象に選んだ作品に、既に注釈書があり、それが優れたものであつたとしても、それをも参考にして、更に自ら深く注釈を進め、新しいもの、より根本的なものを発見して行くべきであらう。

以上は注釈なるものの私風の概念を、若干述べたものであるが、こんな事を今度は話ししの初にしようと考えていた時、雑誌『短歌』の十一月号（昭和六十三年）は、学者注釈者にして且つ歌人としても有名な窪田空穂先生の特集号であった。先生は注釈と批評についても有意義な発言を残されているが、最晩年に、「文芸の研究は即批評ぞと思ふままにぞ我はしにけり」の一詠があると云う。先生は誠に詩人であられた。今ここで注釈など話す私の方は、「ヤボ」だと笑つて下さつて結構です。

○  
以上の話からも、私の注釈とは語釈文法から素材構成、作者の作品に託した思想の諸方面から合せ試みて、その文学性の理解に到る。その為には、作者の研究は勿論、読者や文壇の時代の文学思潮や、作品を読者に伝える伝播者（印刷など）にも調査の手を述べねばならぬ。表面には現れない、裏面迄もうかがわねばならぬことになるが、本日は時間の許された限り、問題となりそうな処々を話して見ることにする。

異本研究をして本文を制定する書誌的なこと、時代文法による準備など、勿論必要であるが略して、「初めに言葉ありき」、語彙の問題から始めよう。朱子学の「性理字義」なる書に対し

て、伊藤仁齋は「語孟字義」を改めて作つて、字義は「小なり」と云つたのは儒学用語のことで、定義も十分にせず、アリズムとか象徴詩など云うに比較して、仁齋は流石に哲学者であつて、「その義を失する時」は大事に到ると云つている。文学書に於ても作者苦心の一語一語を見過せば、殊に韻文に於ては、大きな誤りとなる。散文とて軽くあしらつてはならない語も多い。

常識的には先ず古典語を多くのせる辞書に当る、一応は役立つけれども、深く詳しくとなると残念ながら現存の大小様々の辞書をもつてしても、十分ではない。何か「詳しくは詳注を見られたし」と云つた態度を見せつけられた気になることが屢々である。これでは新しい注釈を志す我々には役に立たない。私は辞書への不満批判を乍失礼、もう度々している。日本語の古往今來の詳しい辞書の作成は、現在の如く一出版社にまかせておいては駄目である。国家の事業として、国語学国文学の学者に限らず、各方面の歴史事実に詳しい人々を総動員し、高邁な職見方針の下に、長年かけて編集すべきである。文化国家である以上、消費税どころでなく、緊急必要事である。国文学界国語学界は挙げて、それを主張して、実現さすべきであらうと云うのが、私の結論である。

こんなことを愛で云つても始まらない。現在の辞書を注釈に用いて困る点を、一二掲げて見る。第一に同じ言葉でも、時代によってその内容に変化を生じた語について、明瞭な説明のないこと。名詞に最も多いが、活用語にもしかり。近頃日本も国際的になつて、翻訳すれば同じ意味でも、その内容に立入れば、国や民族によって相違がある。そこに留意せねば、国際関係にも問題が生じやすいなど云う。外国語の心配もさることながら、日本でも各時代で、政治体制、社会状況も違えば、日常生活にも変化が生じた。すれば同じ言葉でも内容が違つてゐることは確かなのに、その説明がはつきりしないし、書いてあるものも、唯に並記するのみで、それ以上の説明を欠く。旧くとも『日本経済史辞典』などで補うが、最近出版されるこの種、国文学研究から見れば補助的な辞典はこれ又、ひどく安直に過ぎる。

第二に、言葉に、それを使用する時の背景の説明を欠くものが多い。むつかしい云い方であるが、例を引けば俳諧の季語の如きもので、これは別に歳時記が早くから次第に詳しくもなつて存するもので、辞書類はそれを転用して説明に加えてもゐる。短詩型に用いる語は特に、そうした背景の説明が必要で、それを欠くと利用に十分でない。研究の進んだ川柳雑俳中のこの種

のものは、『川柳辞彙』などから転用して補つてゐる。それで転用補うと云うことは、『川柳辞彙』の如きが別に存在しない分野の語では必要な説明が欠けていることを意味する。和歌、連歌、俳諧などで使用する歌語、詩語などは、それに先立つてこの語を使用した、有名な和歌、漢詩の持つてゐる文学味を、甚しい場合は『新古今』などの本歌取りの如く、活用しようとしてゐるのである。辞書では、使用度の多い、その種の語には、注記や用例を加えるべきである。中国では作詩法の書『佩文韻府』の類がある。それでも漢詩作者は学力がなければと云われているのは、古い詩語の理解力が十分でなければ作詩力が十分でないとの意である。日本の和歌に就いては、そうした作歌書が乏しい。辞書はそれを分担すべきでないか。俳諧の歌語は近時漸く注意され出した。私も今少しく西山宗因の俳諧を注釈しているが、満燈飾の如く歌語で埋つてゐる感じである。

これから若干具体例を引くが、私の平生見る処にして、詳注されたものの甚だ少いのは近世文学であつて、自ら近世のものに片寄ることを許されたい。

注釈のこれ迄ない宗因の俳諧などは、従来の辞書は無関心の如くである。川柳雑俳に見るような含みのある語は、洒落本黄表紙にもかなり有り、二百年前の流行語といった処。辞書は、頭

注輪譚などある本からは転用しているが、その数少く、「注釈の方でよろしく」と云う態度がありありと見える。僅に用例のみで簡単にすませるものもある。この様子で見ると、注釈のない作品を手がける場合は、辞書にたよらず、自ら難語カードの作成からかからねばなるまい。当面注釈の対象たる作品は勿論、同時代同様式の作品から用例を広く集め、その歴史的あり方や背景などを明らかにしなければならぬ。

注釈も急げば、辞書を引くさへもどかしいのに、カード取からとはゆっくりとしたことを云うと、腹立たしく思う方もあろうが、やって見ること。それも慣れなければむづかしい。私の恥しい経験を述べよう。大学卒業近く、就職運動をするすべも知らずボカンとしていた処、恩師頼原退蔵先生から、先生が年来志された江戸時代語の研究に、何処からから研究費が出て、手当が出せる。一二年程やって見てはとのお話。仕事は原本を読んで、私がかからないと思う語（難語と称していた）や、詳しい注を必要とするらしい語の用例をカードに抜出すことであった。難語を解釈せよなら大変だが、むづかしそうなものを抜出すなら、私でも出来そう、左様をお願いした。浄瑠璃の丸本から初まったが、余り難語が出て来ない。これは容易だと進めて行くう

ちに、次第に多くなる。前に採用しなかった語が、二回三回と出て来ると、わからなくなつて、又前へもどつて捨つたりする。意味がわからないことがわかる迄にも経験を要することが、次第にわかつて来た。やがては、沢山難語の出て来るのが嬉しく楽しくて、助手の期間が過ぎても、古書を見ては難語のカードを採ることが、半生の癖となつてしまつた。面倒なと思つても、仕初めて見ればこんなものではなうか。

用例を多く重ねてもわからない難語の一つに、近世文学では風俗用語がある。勿論風俗史家の研究によらねばならないが、平安鎌倉期などの有職故実のように、近世風俗研究は学問的体系が整えられてない。私ども若い時からそうだが、五十年後の今日でも、同じような事に見える。殊に風俗小説とでも称してよい、洒落本の如きがあつて、風俗がわからなければ面白味は半減する。それ処ではない、山東京伝の洒落本には登場人物を紹介するに衣装に委曲を尽しているものがある。彼は北尾政演と称して浮世絵師、「新美人合自筆鏡」なる華麗な絵本もある。その絵本のように服装の色彩模様、織り方などを克明に記述する。吉原の大きな妓楼では妓女等の言葉に特色のあることは「傾城觸」なる書に彼は若干紹介してあるが、他の作では、何

様と断らずに、会話だけで何処の世界かを推察させたり、屋内の作りから、その何様かを推察させることもある。又音曲を挿入する。彼の歌唱の上手下手は私はまだわからぬが、荻江節や「めりやす」の作詞家でもあった。以上現代でたとえれば、カラーテレビを見るような洒落本。彼の努力の一端が注釈出来ないと、折角のものが、白黒の外国映画を見ているとかわからないようになってしまう。鑑賞も何も出来たものではない。京伝作を離れても、近世後期の染色は淡い間色が多い。「守貞漫稿」から少々引いて見る。

納戸色（御納戸茶、鉄納戸、藍納戸）

単色（深川単、銀単、紅掛ねずみ）

茶色（うぐいす茶、魚茶、すす竹茶）

茶色は今も用いられるものがあるが、この外に、芝翫茶、瑠寛茶、市紅茶、路考茶、梅幸茶など、役者の号をつけて、近頃流行の茶漬飯でも、役者茶漬など聞いたことはない。これらが作品中にも色々見える。現今の色名一覽の類には殆ど見えない。私は複製の浮世絵でも見て色彩に詳しい人に聞いて見ては思ったことがあったが、今の印刷では十分にその色は出されてはいまい。同じく聞くならば、原物の初印によるべきだろうと、贅沢なことを考えて、実行し得ないというのが実情である。今

日では浮世絵を集めた美術館や博物館も次第にあると聞く、色彩の解説などもしてくれるのでなからうか。

ただし、風俗そのものが判明しても、注釈はそれから先である。その染色の様々を着た人物を、作者は通人として、又野暮として出しているのか。通人氣取りの半可通など云うものであるのか。流行の其中を行ったものか、チグハグなのか、流行おくれか、など登場早々のその衣装の説明から判別した方が、読者としても面白さが加るものと云うべきである。最盛の洒落本では、「この男は半可通で」などと野暮な説明をしない。作者の方で、その方面に通じた者のみを、読者対象としていたからである。後になって滑稽本や人情本など、大衆を読者と予想するようにになると、そのような素人向の解説が採られることとなる。洒落本時代から見れば、自ら面白さを放棄するものとも云える。現代の吾々読者も多読精読よく洒落本作者に選らばれる域にならないと注釈は出来ない。しかしその力が付けば、同種の黄表紙、これは毎頁画を伴っているは御承知の通り、そこに出現する通人、半可通達の衣装に彩色することも出来るようになるうと云うものである。

この近世小説の風俗や生活状態については、現代の方々は、殊に心しなければならぬ大事がある。日本人の生活様式は、明



治大正と洋風の影響を受けて変化して来たが、戦前迄は、近世以来の様式の残存するものが多くて、明治大正生れの者はそれを知っていた。家庭生活一つを採っても、近世以来の風習や生活用品なども、続いていた。その故に、明治以後に出現した辞書は大した説明はなし、圖も入れないで、ただ用途を記すのみであった。辞書界では、その風が今日迄続いている。正徳の昔、「和漢三才圖會」なる本が刊行されて、当代の生活を示す品々が画入で説明されているが、そうした配慮が、近世の事物について加えられた、新しい辞書のないことを遺憾とする。戦後三種の神器など称されるものが出現して以来、台所だけでも、近世的なもの全くと云ってよく、なくなつて来た。中世迄の文学では、台所用品など殆ど出てこないが、近世で庶民生活が対象となれば、自然多くなる。昭和生れの人々は、近世の絵本や作品の挿絵などで探るか、各地に出来ている民具博物館に行つても見なければ、わかるまい。こうした器具迄圖入にした、「近世風俗辞典」(仮称)が補助として早く刊行されることを待望するのみである。

注釈のみでも、わづらわしいのに、浮世絵を見に行けとか、民具博物館を訪ねよとか、又面倒なことを言出したが、考えようでは、それはそれとして楽しいではないか。近頃大

人も子供も塗絵が流行していると云う。黄表紙を見て、遊客の衣裳に塗絵を考へるのも楽しみではなからうか。

次にこれも難語中の難語の一に、文学論の用語がある。これは後述すべき時代思潮に属するものだが、爰に挿し入れておく。文学論の用語とは、伊藤仁斎の儒学に云う「字義」に相当するものである。儒者は學術用語の理解は論の基礎をなすものとして、これを大切にすが、日本の昔の文学者は平安の古えから近世迄も余り論理的でなかつた。大事な用語を定義なしで使用している。「誠」「虚爽」の概念なども、面々勝手に使つて、同じ語を全く反対の意味で用いる例さえある始末。各人各様、それを、研究的に見定めるのが大變である。近世に入ると、虚爽、人情などの語は、歌論・俳論・演劇論などに使用される。これらは中国の詩文論や儒学の用語でもある。どの程度それらを採入しているか。殊に日本近世儒学には、朱子、陽明、古学(古義堂、護國などで又別)の三流の別がある。それぞれ使用者の教養によって相違が生じる。日本の従来の辞書では、その区別を示していない。私の知る処では、岩波書店の「日本思想大系」の注釈について、当時の編集部でこれらの別をしなればとの話が出たのが初めてであった。しかしこの大系の注は簡單

で、どこ迄きびしく出来ているかは心配である。例えば賀茂真淵の「人情」は彼は菴園派の渡辺蒙庵に儒学を学んだので、徂徠の説をあてはめて見ると云う風である。本居宣長の「物のあはれ」は、早い稿では「人情」とあつた。儒学にあてはめると、これも徂徠説から出たらしい。近松の虚実皮膜論をまとめたのが穂積以貫らしい。とすれば古義堂系と考えて見ようとは、昏て私が試みたことである。それぞれの作者の教養で検討する。

これは作者の伝記研究の重要課題とすべきである。正式な学問を修めてないらしく、云わば常識的に立論する、支考や馬琴の如くになると更にむづかしい。片方で、馬琴は勸善懲惡を唱え、片方で自分の作品は戯作（なぐさみ）であると云う。研究者の方で、彼の説を一本にまとめねばならない。支考の俳論や馬琴の小説論は史上で略すわけに行かぬとすれば、注釈者の方で、筋の通る如くまとめ上げねばなるまい。それぞれの文学論を略したり、誤ったりしては、正しい文学性の把握にはならないであらう。

○  
本筋へ立返って、語釈の次は文章、文体論である。国語学の方でも、時代的な文章史の研究が進んでいるが、未だ近世に迄及んでいないようである。勿論個人的な文体論と作品の様式の

文体論がある。作品の様式とは小説で浮世草子や洒落本と称したり、俳諧で談林派、蕉風と称したりするものの中に於ける文体である。これら様式毎の文体を心得ることも重要である。その上、近世では、文語文と口語文の混淆、和文体と漢文体の混淆、文章体と会話体の混淆、雅文体と俗文体の混淆、そして混淆しない口語文、文語文、漢文、和文、文章体、会話体、雅文、俗文の様々も存する。そして混淆しないものにも、漢文では古文辞もあれば、唐代の古文もあり、和文でも擬古文がある。時代時代に様々。また和歌に明かで、万葉調とか古今調とか様々の調子がある。殊に困ったことには、近世では和漢雅俗あらゆる文章を一人で作ることの出来た人達も多かった。それらを十分に吟味弁別して、文章の特質、文学表現上の効果を見ぬかねばならぬ。誰も知る如く上田秋成の「雨月物語」は、多くの人々の注釈があつて明になった処では、叙上の様々の文体を混淆せしめて、作品上の効果を上げている。どの作品でも、「雨月」を分析したと同じ如き配慮をもって文章の特色を考えつつ、注釈して行かねばなるまい。「好色一代男」のみが西鶴作で、西鶴作とされる他は文体が相違しているから、彼でない」と主張する説に賛成するとすれば、様々の文体の中をかくくぐつて、更に深い検討を試みねばならぬ。逆に全部西鶴作だとか、或は

助作者があつたとする場合も、一章の中一文の中についても緻密に判別して行かねばならぬ。これら文学史上の難問も、詳しく文体を弁別して行く注釈でさばくの外に解決の方法はあるまいと思われるが、如何であらうか。

次に構成論。俳諧に於いて俳言と歌語を混ぜ合わせるのも構成であるが、最も問題となるは、近世の戯曲、小説に於ける構成である。和漢古今の古典、先行作品から材を得る、又は歴史上の出来事、現在社会の事件など、いずれも必ず何かを使用してゐるものだと思つて、作品に対すべきである。例えば小説の中へ既出の戯曲中の人物を登場させるなど、最も多い。その時は何の紹介がなくともその種の浄瑠璃歌舞伎の代表作品に於ける、その人物の性格行爲、惹起させた事件など、全部思い出すことが、当面の作品を理解するに必要である。歴史上の人物や当代人の如く實在の人物についても、事実や虚説を合せて調査して、作品と対比せねばならない。以上の場合人物名だけでもとにかくそのままに出ているので、手掛りがあるけれども、中国作品中の人物を利用する場合は、全く日本人名になつてゐる為に発見はむづかしい。もつとも日本の歴史上の人物や先行演劇の人物の場合も、その性格や行動を作中に創作した人物に移す場

合も多いので、中国小説利用と全く同じになる。これが発見出来ないといふ、構成論が不可能となつて、文学性どころではなくなつてしまふ。

初期では上田秋成、後には曲亭馬琴などこの構成に特に努力した説本作家にあつては、一人物、一事件をとつても、複数の素材を使用していることを忘れてはならない。既に研究の進んでいる「雨月物語」は、表面整然たる各章が、裏から見れば沢山の和漢古今の作品や人物を組合せたゴシック式の如きものであつた。それを一本にまとめた処に、秋成の構成力を知るのである。馬琴の「里見八犬伝」の人物達も、馬琴の凝りに凝つた複雑な考案の産物であることが、近時明らかになつてゐる。唯に、この二人に限るまいし、説本のみにも限るまい。歌舞伎や浄瑠璃などにも複雑なものがあるであらうが、前述したが、この一種出典考も、注釈の最重要事なのである。ただし出典を発見したのみで終る論文報告を時々見る。それはそれで有難いが、作者は、その全体を採る場合もあれば、捨てる処があり、付け加える処があり、全体にやや替える処があつたりする。これが作者の創作力の發揮処で、それで如何に面白くなつたか、即ちどんな文学性が發揮されているか迄を考察しなければならぬこと勿論である。

この構成論上で、近世文学では余り注意されないが、無視出来ないのは、近代小説に見る如く、作者自らなり、近い人々に於いて体験し見聞した、自他の経験や、その所懐をテーマにし、素材にしたことがないかの一事である。

近頃私は村松定孝氏の「あぢさい供養頌」を読んだ。泉鏡

花とその近しい人々の伝記を調査して、それぞれ鏡花の作品に如何に顕現しているかを詳しく研究されている。

近世文学でも作者の伝記研究が盛であるが、こうした研究があるだろうか。京伝の妻とした菊園が吉原出で、若干作品に見えるところか秋成の生涯の所懐が処々にうかがわれる程度の指摘などの以上には出ていないように思われる。村松氏の著述を読みながら、私の脳中を去来したのは、曲亭馬琴の日記や書簡が沢山活字化されているが、これらに見える馬琴とその周囲が彼の作中に組入れられていないのだろうか。そうした研究は未だないように思うかと云うことであつた。作品の注釈にも作者伝記の研究が必要なことで、当然のことと本日は特別に述べないことにしたが、伝記研究の方でも、作品研究（注釈）に関係ありと思われる処には、特に留意して、詳しく立入ってほしいことである。

構成の研究を物に替へれば、重要文化材の建物を解体して、

復元する作用に似ている。その間に一つ一つの素材の働きや美さへの参加の様相を詳しく検討する。その後復元して、全体の美さに判断を下す。文学に於いては「美さ」を「面白さ」にかへれば同じような吟味であり処作であるまいか。

○

最後に、それぞれまとまった部分のテーマや作者が託した思想が問題となる。大きく云えば人生観や社会観などが問題となる。テーマは当面した作品に関することで、叙上の注釈が深く詳しくなるに従つて明確になるものである。そして人生観、社会観と共に、各作者の伝記研究で、その思想傾向を把握することによつて次第に明らかになる。作者の伝記研究には、必ずこの思想傾向の調査を、それも作品研究と歩調を合せて明らかになることであるが是非務めるべきである。ここでも我々は作品を歴史的存在として見て来たのであるが、作者の思想も歴史的存在として把握すべきであろう。これを簡単に一例のみで述べれば、元来人間は喜怒哀楽の感情を持つこと古今同じであらうが、その感情を起す原因は、時代によつて違つてゐる。人生観も社会観も、社会のあり方に影響される。主従関係も、平安朝の公卿の社会、近世の武家や町人の社会とでは違つてゐるのが当然である。親子兄弟の家族関係や精神状態さえも亦違つて

いたであろう。そうしたそれぞれの社会内に於ける作者の在り方を勘定した上で、人生観や社会観、そしてそれらに根ざしたテーマを見定めて行くべきである。そこが作品に現代的意義を求めて行く批評と国文学研究の相違である。そして、そのテーマ、人生観、社会観等を明らかにすることは、我々に於ては一つの手続きであつて、それを如何に文学作品に表現したかを、きわめることが我々の目的とすべきである。その為には以上述べた如く、広く深く表現全体に渡つて注釈するの外はない。古くして新しい注釈は、古典文学研究の正道なりと云つてよろしいであらう。

プロレタリア文学が盛んで、作品の思想宣伝を重視した昭和の初年、私は九鬼周造先生の文学概論の講義を受けた。

先生は、今は書名を失念したが、二つのプロレタリア作品をあげて、思想を第一とした作品と、今一つは文学的表現をも軽んじてないものとを並べて、後者を採られて、文学は表現であると云われたことを記憶している。

○  
以上の如き注釈作業をつみ重ねて、一通り終つた処で、その作品から得た面白さを、又面白い処を、素直に書きとめて見ることである。その時、無理に初めから文芸学的用語など使用する

る必要はない。文学の面白さを論じて文芸学的用語によらなければ学問でないなど思うのは、一時の国文学界のコンプレックスの残滓でなからうか。ただし素直なものが出来上つた上で、文学概論などにあたって見て、恰好な用語があれば使用して悪いことは勿論ない。しかし外国の文学論から組立てた概論書に對比して見て、古典に於ては日本的なものが、案外に浮び出て来るのではなからうか。前出したカラーテレビを見るような山東京伝の洒落本の場合を持出して見る。文学は文字を用いた芸術である。別に色彩や造型の芸術には絵画や彫刻があり、音曲の芸術に音楽が別にある。それを綜合した演劇もある。京伝は文字の芸術をもつて、絵画音楽に出来だけ迫まらうとしている。十八世紀にかかる文学を残した人があるだらうか。近世文学にも詳しい石川淳氏は京伝を評して「西欧近代の芸文の場にあそぶに堪へるやうな素質と才能と感覚と機器をそなへた戯作者」と評したが、かかる点を挿したものであらうか。と云うようなことにならうか。など考えて見るのも必要なことである。

しかし一作品の注釈でも一回で済むものではない。更に時を経て、試みれば新しいものが加わる。時々思い出せば加えねばならぬことが、いくつも出てくる。これらを加えて、詳しく深くなるものである。皆さんも大きな作品は一部分でもよい。章

にわかつたものはその一章でもよい。参考書の多い学校や諸方の図書館などを利用して、在学中に注釈を心がけることをお願する。

私達学生時に、注釈は語釈文法に重点があつて、それにあきたらず評釈や文芸学的発言などあつたことは前述したが、私が今回かかる題で、皆さんに聞いていただくのは、今日の学界は詳しい注釈が殆ど刊行されないことにあきたらない為である。浅くても広い知識を、要領よく得ようとする社会や出版社の方向が、その原因の大なるものであらう。また書誌、伝記、出典考などばかりが、勿論それらも必要なが、学界を覆う。しかしらずんば国文学者も、古典批評に走る。科学としての国文学研究の為に、真の意味の詳しい注釈の出現を望んでいる次第である。

もう時間もなくなつた。この辺で「落」を付けることにする。かく云う中村自身果して注釈の見るべきものを刊行しているかと尋ねられれば、「参つた」と云わざるを得ない。平常、詳注のつもりで調査していた作品はいくつかあるが、刊行の機会が与えられた時には、必ずのように公の仕事に追われて、今日に到つたと、云うのも逃口上である。私を悪い見本として、熱心な注釈を試みていただきたい。真の意味で、楽しい仕事である

ことの保証だけは、私にも出来ると思ふことである。

(この稿は昭和六十三年十一月九日午後一時から、甲南女子大学に於いての講演用に作成したものである。講演では時間の都合上省略した処もあつたが、その部分も原稿のまま残すことにした)